

ライフ・ワーク・バランス講演会「これからの働き方を考える」

すべての人が尊重され、活躍できる職場に



2023年9月20日にライフ・ワーク・バランス講演会を開催しました。講師には本学のライフ・ワーク・バランス相談員を務めている荒川紀子さんをお招きし、男性の育児取得や介護と仕事の両立など、ライフ・ワーク・バランスに関する具体的な課題やその

との大切さがメッセージとして伝えられました。

参加者からは、「ライフ・ワーク・バランスは自分の専門性からある程度知っているつもりでしたが、やはり専門の先生から具体的にお話をうかがうと自分の考えや思い込みを整理することができました。」「多くの方がそれぞれの大変さを抱えながら頑張っていることを知っています。多様な背景の方がそれぞれの能力を活かして組織や社会へ貢献できるような環境構築へ少しでも貢献したいと思いました。」「育児、介護休業を取りやすい環境の前提として、そもそも『定時で帰れる職場』を目指すために働き方改革が必要、という考え方は目からうろこで、確かに、そのような職場の方が相互理解が進みやすいと思いました。」などの感想が寄せられました。また、「本学にライフ・ワーク・バランス相談ができる相談員さんがいることを知ることができました。」との声も寄せられ、相談事業・支援事業の周知にもつながったことがうかがえます。

ライフ・ワーク・バランスをテーマとし、働き方に焦点を当てた講演会は今回が初めてであったため、一般的な話のボリュームが多くなりましたが、参加者の感想などから、より具体的な場面に絞り込んだテーマでの講演会へのニーズがあることも判明しました。今後の取組への参考としたと思います。(藤山)



Contents

- 1 ライフ・ワーク・バランス講演会「これからの働き方を考える」
- 2 学内における緊急時の障がいのある人への対応について
日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク
寄稿「青鳩祭(荒川キャンパス)の参加報告」
寄稿「ふわふわ」を「かたち」にするために
- 3 交流プログラム
部局出前説明会
手話講習会【初級・中級】
コラム ダイバーシティとスポーツ
- 4 よるダイバー
東京都立大学一時保育施設「都立大KIDS」
ダイバーシティ・ブックレビュー

よるダイバー

男女共同参画や障がい、文化的多様性、セクシュアル・マイノリティなどについて、ミニ講義やディスカッションなどで学びあうダイバーシティ推進室おなじみの「よるダイバー」。後期も対面とオンラインのハイブリッドで開催しました。前期から引き続き参加する方、はじめましての方、久しぶりの卒業生など、今期も多彩な参加者が、時にまじめに、時にわいわいと、ダイバーシティについて学び、語る場となりました。元支援スタッフの卒業生が自身の就業経験を語る回もあり、参加者にとって、ダイバーシティがさらに身近なテーマとして感じられたのではないのでしょうか。

参加者からは、「自身の研究内容に沿った内容で、大変興味深く学ばせてもらえました」「参加者相互の意見交換はとても良いと思います。お互いの認識の違いに気が付くことも大切なことだと感じます」など、前向きな感想をいただきました。「金曜の18時はよるダイバー」が定着するように、引き続き取り組んでいきたいです。(藤山)



よるダイバー2023・後期 コンテンツ

- 10月13日「よるダイバー」のめざすもの / 講師：益子徹
- 10月20日 障がいを知る(概念整理) / 講師：益子徹
- 10月27日 甲子園からジェンダーを考える / 講師：藤山新
- 11月10日 障がいを読む(事例検討) / 講師：都立大OB
- 11月17日 文化の多様性とジェンダー平等を考える / 講師：藤山新
- 12月 1日 障がいを理解する「包摂しない」というスイッチが招くもの / 講師：益子徹
- 12月 8日 セクシュアル・マイノリティをめぐるあれこれ / 講師：藤山新
- 12月15日 まとめ-あなたが考えた、ダイバーシティってなんだろう? / 講師：益子徹

東京都立大学一時保育施設「都立大KIDS」



※ハロウィンの仮装で遊びに来てくれた子ども達

本学では、教員、職員、学生が利用できる一時保育施設「都立大KIDS」を南大沢キャンパス近くで運営しています。

こじんまりとした施設ですが、そのぶん先生方の目が十分に届く、アットホームな雰囲気が特徴です。季節に合わせた制作やイベントの実施など、先生方の工夫で毎日楽しく過ごすことができます。10月はハロウィンにあわせて、仮装した子どもたちが大学へやってきてくれました。心地よい日差しの中、学長室、ダイバーシティ推進室の職員や支援スタッフの学生との交流を楽しんでくれたようです。

都立大KIDSでは、体験保育や施設見学を随時行っています。教員、職員、学生のどなたでもご利用いただけますので、気になったらまずはダイバーシティ推進室か学長室のダイバーシティ担当までお問い合わせください。(藤山)

コラム ダイバーシティ・ブックレビュー (学長室：堀内 牧子)

野田サトル作 『ゴールデンカムイ』 集英社

私给大家介绍するのは、野田サトル作の「ゴールデンカムイ」(全31巻)です。舞台は明治末期の北海道・樺太。日露戦争から帰還した元軍人の杉元佐一とアイヌの少女・アシリバが主人公で、二人が北海道のどこかに隠された金塊を探す旅を行うという内容です。単なる歴史・冒険漫画では終わらず、注目すべきはアイヌの文化を非常に丁寧に描いているという点です。アイヌの人々が当時どのような暮らしを行っていたのか、自然や生き物との関わり方、特にヒグマを「キムンカムイ」(アイヌ語で「山の神」と呼び、特別な存在として扱っていたことに惹かれました。アイヌでは、自然界だけでなく身の回りのすべてのものに魂が宿ると考えられていること、決して必要分以上の狩りを行わないこと、自然に寄り添い自然と共に生活する。それは現代の私たちが忘れてかかっていることなのではないでしょうか。私はこの漫画を読んでアイヌに興味を持ち、熊、特にヒグマの生態について調べ、また実際にアイヌの人々が暮らした痕跡などに触れてみたいと思い、北海道を訪れた際に「川村カ子ト(かねと)アイヌ記念館」(旭川市/日本最古で唯一の私設アイヌ資料館)へ足を運びました。資料館の展示物は「ゴールデンカムイ」の漫画の世界そのまま、改めてこの作品は、細かい描写と丁寧な取材によって成り立っているのだと感激しました。いつの日か、北海道白老町にある「ウポポイ(民族共生象徴空間)」へも訪れたいと思っています。



この「ゴールデンカムイ」をきっかけに、みなさんもアイヌに興味を持ち、本学のダイバーシティ基本方針の3本柱の一つである「多様性を踏まえた構成員支援」について考える機会を持ちませんか。



編集後記

ブックレビューで堀内係長よりアイヌ資料館の紹介がありましたが、個人的に大阪府博公園内にある国立民族博物館もおおすすめです。資料の豊富さに加えて展示のしかたが素晴らしく、世界各地の民族的始まりと、影響し合いながら多様に発展する様子が俯瞰目線で見られるだけでなく、楽器などにフォーカスした身近な展示等もあり、いつまでも飽きることがありません。世界の中の、アジアの中の、日本が見えてきます。(兼子)

東京都立大学 ダイバーシティ推進室
 〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 図書館本館1階
 電話：042-677-1337(直通) / 内線2571
 E-Mail : diverwww@tmu.ac.jp
 URL : https://diversity.fpark.tmu.ac.jp/
 発行日：2023年12月26日
 編集・発行



学内における緊急時の障がいのある人への対応について

昨年度のダイバーシティウィークでは、近年の様々な災害を踏まえ、ダイバーシティ×防災を1つのテーマとして、様々な企画を行いました。そこでは、講師の方々から災害時の避難に関する様々な知見が得られるだけでなく、学内の防災に应用するために必要な学内での防災意識の喚起を図ることができました。これらの知見などを踏まえ、この度当室では、緊急時の対応について簡潔にまとめたマニュアルを発行しました。

このマニュアルは、障がいのある人と共に災害時に避難をする際にどのように互いが配慮をし合うのか、といったことについてまとめたものです。障がいのある人と関わったことがない人が大多数の中で、「どのような配慮をしたら良いかわからない」「何か手伝うといっても、専門的な知識が必要なのではないか」といった不安を持つ人は多く、また、障がいのある人達も「どのように配慮依頼をしたらよいかかわからない」といった人は少なくありません。そういった中で、このマニュアルでは「誰でもできる配慮」を中心にまとめており、一方向的な支援をする／される、だけでなく、共に逃げるためにどうしたらよいか、といったことを中心にまとめることで、互いの配慮についてのための意識を低減することを目指しています。

実際に発災した際には誰もが避難者であり、それは学内外の支援者／各教職員も同様です。そのような時に、どのようにしたら多様性のある構成員が助け合えるのか。これを読んで是非、皆さん一緒に考えてみませんか？(益子)



日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan) 第19回 日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム



2023年11月5日、今年度も日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan) のシンポジウムにて学生支援スタッフと共に実践事例の報告をしました。今年は数年ぶりに対面での開催であり、10大学が参加しました。

今回の発表に向けて準備したものの中には、支援を行う上での理念をMVV (Mission, Vision, Value) の形でまとめたものがありました。報告に向けたまとめの作業の際には、約10名の学生たちが自分たちのダイバーシティ推進室についてのイメージや大事にしている活動などについて熱心に遅くまで議論する姿がありました。「私の思うダイバー室の印象は〇〇じゃなくて△△という言葉のほうがしっくりくる」「やっぱり□□を大事にして活動していきたい」という思いと共に紡がれた言葉は、次年度以降の学生支援スタッフにもしっかり引き継がれていく理念を表したものとなったと思われます。

これからも学内外での事例報告等を繰り返す中で、当室の魅力を発信すると共に、支援の質の向上につなげていきたいと思えます。(益子)

交流プログラム (社会科見学・フィールドワーク)



今年度は5月の高尾山遠足をはじめ、様々な体験を学生支援スタッフと行いました。今回はその中でも、発達障がいのある生徒を中心としたさくらんぼ教室(三鷹教室)への見学と江の島にて行った車いす体験について報告します。

さくらんぼ教室は、1月のバリアフリー講習会に講師としてもご登壇いただく濱野先生がご勤務されている株式会社Glow-Sが運営する学習塾です。発達障がいのある大学生も全国的に増加傾向にある中で、本学においてもその傾向は同様であり、今回学生支援スタッフと共に見学をさせていただきました。学生支援スタッフからはSST (Social Skill Training) を生徒たちが行う様子を見て、「多くの人があいつの間にかできるようになっていることを丁寧に取り組んでみる」という視点の大切さについて感想が寄せられました。

次に、江の島のフィールドワークでは、車いすを学外で扱うことが無い学生支援スタッフたちと共に、バリアフリーのチェックや試乗を行いました。当日は稲田堤駅で集合し、車いす2台を交代で押したり乗ったりしつつ、公共交通機関を移動するところから行いました。最初はハラハラしながらも、充実した1日を過ごした彼らはきっと、これらの体験を通し、道端で車いすを押している人が困っている様子があったときに、どのようにフォローしたらいいのか、といったことや、車いすユーザーの方と外出をすることへの戸惑い意識の低減に繋げられる機会となったのではないかと思います。

これからも当室では、学生支援スタッフと共に、多様な人々の生活の中の困りごとについて共に体験し、解決方法を考えることのできるようにしたら多様な人々を包摂した社会の実現ができるのかについて共に考えていきたいと思えます。ご関心のある方がいれば是非ご参加されてみませんか？(益子)

部局出前説明会(都市環境学部)

ダイバーシティ推進室の活動や、学生対応のポイントなどを教員の皆様にご案内する部局出前説明会を、都市環境学部で行いました。当日は教授会の後にお時間をいただき、およそ60名の先生方に参加いただきました。セクシュアル・マイノリティの学生への対応と、障がいのある学生への支援や対応について、それぞれ担当の特任研究員から説明を行ったうえで、質疑応答を行いました。

ダイバーシティ推進室の支援内容やその取組については、まだまだ十分に周知が行き渡っているとは言えない状況にあります。本学のさらなるダイバーシティ&インクルージョン推進のためにも、今後もこうした機会を積極的に作り、学内での周知に取り組んでいきたいと考えています。(藤山)

手話講習会【初級・中級】

今年度も手話講習会については初級編(前期)と中級編(後期)に分けて開講しました。参加者はいずれも学部の1年生から大学4年生、教員など多岐に渡りました。初級では、講習中には、指文字や挨拶などの手話表現に始まり、趣味や出身地の話などを練習しました。中級では初級から継続して受講する学生も多く、日常会話の場面に則した会話の練習をしました。

参加者からは「ずっとやりたと思っていた手話をとてもアットホームな雰囲気の中で楽しく学べました。ありがとうございました。」といった感想や、「手話を使う場面は日常生活の中であまり多く感じないが、実際に手話を使って言いたいことが伝わったり、相手の話が理解できたりしたら嬉しいと感じた。直接日常生活で困っていることや大変なことも聞けたので、できることがあれば手話をはじめ、様々なことで力になりたいと思った。」といった感想もありました。今後ともこれらの活動を継続することで、学内の言葉のバリアを取り除けるように努めていきたいと思えます。(益子)



青鳩祭では、日々の活動紹介やろう者が日常生活で使う手話などについて理解を深められるような企画を行いました。特に、手話表現などのクイズなどを行った「手話講習会」や、実際に車いすに乗ってキャンパス内のバリアを体験する「バリアフリー探検隊」は、多くの方に参加していただけて、とてもやりがいを感じました。

より多くの方に多様性のある社会を身近に感じていただきた、という思いで企画していましたが、同時に自身ダイバーシティの推進のために何ができるかを改めて考える機会にもなりました。例えば、知的障がいのある方にも企画を楽しんでいただくために、資料や企画の進行を工夫してみるなど、誰もが過こしやすい空間を作るために、他のスタッフと一緒に考えている時間とても充実していたなと思えます。

普段の支援活動ではあまり出会う機会のない方々との交流もたくさんできて、とても楽しい思い出になりました！



「青鳩祭(荒川キャンパス)の参加報告」

誰もが生きる喜びを実感しながら、共に暮らし、尊重しあえる社会であってほしい。バリアフリーチェックや言葉の地図の作成、手話講習会の活動は、この社会が変わりうる具体的な方法を私に教えてくれています。

これまで、冒頭のような社会の姿を共有すると、「ふわふわしてる」「そんなきれいなこと言われても…」という反応を受け取ることが多くありました。はじめは、「思い描くことをしなければ、動き始めることはできないの」としか思えませんでした。しかしある時から、至らない自分、現実に即して具体的に説明することができない自分の存在を感じるようになりました。実際は、私の中でも「ふわふわ」としか捉えられていないのかも知れないと。

「ふわふわ」を「かたちにするために」、「今」「ここ」で「私」には何ができるのか。日々ダイバーシティ推進室での活動に取り組み、一つひとつの活動が確実にそこにある、「かたち」であるということを実感しています。思い描く社会を現実のものにするために、模索をしながらも、その状態に甘えることなく、今後でもできることを丁寧に積み重ねていきたいです。



「ふわふわ」を「かたち」にするために

福岡県の北西部、福岡市のほど近くに、古賀市という人口6万人ほどの市があります。2023年10月、福岡県古賀市で「つながる！多文化ミニ運動会」というイベントが行われました。これは、古賀市が外国籍市民向けに実施している交流型日本語教室のスタッフの発案で、身体を動かしながら交流することで相互のコミュニケーションを図ろうと、2022年から始まったそうです。今回は、外国籍の人から教わる機会をつくることで、外国籍市民は「お客さん」ではなく「地域で共に暮らす仲間」であることを感じてもらうと、学習者の母国であるベトナムのスポーツ、ダーカウを取り入れての開催となりました。

「多文化の共生」ということがしばしば言われます。グローバル化の進展に呼応するかのよう、日本各地においても外国籍の住民が大幅に増えています。しかし、文化や風習が違えば、日常生活のルールも異なってくるため、地域住民とのすれ違いやトラブルなども生じていることが、しばしばメディアなどで伝えられます。多文化が共生するには最低限、共通したルールが必要と言えます。

そう考えた時に、スポーツはまさしく共通のルールに従って、共通の目的に向かって協力する営みと行うことができます。スポーツを通じた、外国籍の市民とのコミュニケーションの体験は、その後の日常生活に必要な関係作りにも、プラスに作用する可能性があるのではないのでしょうか。そうした意味で、スポーツは多文化の共生を進めるきっかけとなる、一つの有効なツールとしての価値を持つのもかもしれません。(藤山)

コラム ダイバーシティとスポーツ 多文化運動会